慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	修験道の思想：修験者の思想と行動 1
Sub Title	Religious thought of Shugendo
Author	宮家, 準(Miyake, Hitoshi)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1963
Jtitle	哲學 No.43 (1963. 1) ,p.199- 226
JaLC DOI	
Abstract	I take the religious thought of Shugendo as a common thinking pattern of religious leaders-Shugenjas-who practice magicoreligious acts using the supernatural power initiated by mountain austerities. The purpose of this report is to make clear their thinking pattern. In order to achieve this object, I will analyze the process of their religious thinking. Practising austerities in a sacred mountain, Shugenjas are demanded to awake their Buddha-Nature, which they possess by nature and yet they do not realize, by the doctrine of his sect. On the other hand, they must pray for taking away their believer's bad fate which causes their misfortune. At the same time they must explain to their believers, by the help of the Shugendo doctrine, why they can give good fortunes to them. Thus has been formed the religious thought of Shugenjas. Usually they say, "Practising austerities in a mountain, I have attained the same stage as the Buddha who can take away believer's misfortune. Therefore I am able to give good fortunes to my believers, using the supernatural power of the Budda." Moreover, when they believe that they can help their believers by religious actions, their religious thought is turned into a strong belief in their mind as it is proved to be real.
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000043-0199

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

修験道の思想

——修験者の思想と行動 1——

宮　家　　準

一

修験道は，山岳で修行をつむことによつて超自然的な力をえ，更にその力を用いて，庶民の現実生活から生じる悩みの究極的解決をはかることを目的とする宗教である．このような性格からうかがわれるように，修験道ではこうした宗教行動を行なう宗教的指導者——修験者——(第1図参照)が最も重要な位置を占めている．その故もあつて，日本庶民宗教解明のよすがとして彼等の組織や儀礼が盛んに研究され，すでにこれ迄多くの研究が発表されている．それにもかゝわらず，彼等に共通の考え方の型，すなわちその思想，に関する研究は管見の及ぶ限りほとんどなされていないようである．

修験者の思想は，彼等共通の行動様式をなつとくのいくように説明し，論証する——意味づける——役割をはたすとともに，内面化されて彼等の信仰体制となり，強い信念を持つて行動させる動因となつている．[(1)] こう考えるならば，庶民の宗教生活に深い影響を及ぼしている修験者の宗教行動を理解する手段の一つとして，彼等のいだいている思想を研究することが重要な問題となつてくるのである．

彼等の思想は，一般に想像されるように，決して教団で権威化している思想——教団教義——と完全に同じではない．地域社会で活躍する修験者

の個々の宗教体験・宗教行動に大幅な自主性をもたしている修験道では，教団は単に彼等の宗教行動の便宜をはかる為の機関であるにすぎない．それ故教義とても，彼等がめいめいの宗教行動を意味づける為の素材を提供しているにすぎないのである．[2] 特定の教義を維持し布教することを目的とした教団の教義とは違つた性格を持つているといえよう．私が教団教義をそのまゝ修験者の思想として分析する研究方法をとらないのはこのような理由によるのである．

地域社会において，信者の要請に応じて——この要請に応じていない修験者はその社会での宗教的指導者としての地位を失うことになるであろう——加持祈禱という宗教行動を行なつている修験者は，入峰修行を中心とした教団教義や，入峰の際先達から儀礼とあわせて教えられた教義をもとにして，加持祈禱という地域社会での自己の宗教行動を意味づけ，信者になつとくさせようとすると共に，自分も又なつとくしようとしているのである．長年にわたるこのような思惟の所産こそ，彼等の思想なのである．

それ故，彼等の思想を宗教行動の意味づけとしてとらえ，明らかにしようとするこの小論の目的は，修験者の宗教行動と関聯づけながら，その思想形成の過程をあとづける方法をとることによつて達成し得るであろう．以下の論述はこうした意図にのつとつて，まず修験者の思想形成の素材となつている教義や教団儀礼等をとりあげたのちに，思想形成の大きな要因である信者の修験者への宗教的要請を示し，これらをもとにした修験者の思想形成の過程をその宗教行動とむすびつけて考え，最後に修験者の思想の内容を提示するという順序ですゝめたいと思う．なお資料は，主として旧本山系修験の教典や出版物・修験者の手記資料・実態調査をもとにしている．以下いちいちことわらないが本論稿で示される修験道の思想はこうした資料の範囲内のものであることは云うまでもない．

註 1. 岸本英夫 「宗教学」63頁—101頁参照

第１図　火生三昧の法を行なう修験者

註 2. 宮家　準「現代修験教団研究序説」宗教学雑誌　1号所収　参照

二

「当道依経者法爾常恒経是也．諸仏已証法曼荼羅不レ識ニ緗絹一．不レ載ニ筆墨一処也．[1]」（傍点宮家以下同じ）

と大言している修験道においても，文字を用いて自己の依拠する立場を表明する書物はあらわれている．それ故，私も特定宗教の思想研究家の誰しもがてがけるように，教団で所依の教典としている書物の分析からこの論稿を進めることにしよう．

修験教団では，修験宗が文部省に提出した文書の中で

「大日・金剛経を経本に，法華・不動・錫杖・般若の諸大乗経・修要秘決集・役行者講式・修験勤行式などの諸典を所依の要典とし．[2]」

といつているように，仏教経典なかんずく，真言密教・天台等の経本をそのまゝ依経としているけれども，それだけでなく他に，不動経・錫杖経・修要秘決集・役行者講式・修験勤行式等修験独自の教典も保持しているのである．

私は以下本節ではこうした修験道独自の教典の中核をなす，「修験修要秘決集」をとりあげて見ることにしたい．

「修験修要秘決集」は，大永年間（1521—1525）彦山の修験者即伝が編集した，上・中・下 三巻より成る書物である．修験道ではこうした書物ができあがる以前には，先達が修験者の修行の進歩とてらしあわせて，一枚一枚の切紙に託してその思想を伝達していた．即伝はこうした切紙をあつめて体系化し本書を作りあげたのである．彼は呵吸房ともいい，大先達承運の弟子で，彦山霊山寺面谷華蔵院に住んだ権少僧都法印であつた．大永5年秋北陸に行脚し，加賀国那谷寺の岩窟で修行，次いで白山・日光にも

修行したと云われている．著書には，本書の他に，「修験速証集」・「三峰相承法則密記」・「峯中灌頂密蔵」・「彦山秘訣印信口決集」等があり，文字通り修験教義の大成者である．彼の主著である本書は，元禄4年不慧先達により，寛政10年薩摩般若院の俊親により，それぞれ刊行されたが，其後は刊行されず，現在では 日本大蔵経所収「修験道章疏 二」に収録されている．

さて即伝の思想紹介に入る前に，まずこの書物の構成上の特徴をとりあげて見よう．

まず第一に，本書に収められている切紙の内容を整理して見ると，修験についての一般的説明 6・所依の経本 1・世界観 1・本尊観 1・人間観 1・成仏観 1・開祖の伝記 2・衣体 15・入峰修行 12・灌頂 2・供養法 2・その他 3となつている．このように衣体と入峰修行の説明に多くの切紙がさかれていることは，即伝の思想が入峰修行の意味づけ（衣体も入峰修行に用いるもの故）を通して展開したことを物語つているといえよう．

次に本書の構成が，巻上；衣体分十二通・浅略分七通（主として修験一般・世界観・人間観）．巻中；深秘分七通（成仏観・本尊観）・極秘分七通（入峰作法）．巻下；私用分七通（灌頂等）・添書分七通（教祖伝等）という順序になつていて，依然として修行が進むにつれて浅略から深秘をへて極秘分を教えるという形式をとつていることや，各切紙の最後に，

「右秘決者．修験最頂実談．真妄和合内証也．縦雖レ為二深智高行之仁一於下非客与二未修行一前上者敢不レ可レ説レ之．」(3)

という文が必らず附せられていること，重要な部分の多くが口伝によるべきものとされて記されてないことなどからわかるように，その教えは元来秘すべきものであるということが特に強調されている．

しかもこうした教えは，

「故修験立義者　不レ仮二仏教一不レ立二文字一．唯以心伝心．

設雖レ因ニ師説教文一而不下以ニ文句一為上レ道.」[4]

というように，「以心伝心」によつて伝えられるべきものとして，個々の修験者の体験が極端に重視されているのである．これを要約すれば，「修要秘決集」の構成等からうかがわれる限りでは，修験道では宗教体験や宗教行動をとおして思想を体得することが何よりも重視されしかもその思想は未修行のものにはかたく秘すべきものとされているのである．

もつとも，本書はこのような体験第一主義のみのべて体系的な思想を何等展開していないというわけではない．最初に述べたように入峰修行を意味づける為の人間観・世界観（山岳観）・成仏観・本尊観等が密教の影響を強く受けながらも展開されているのである．

彼によれば，まず，

「修験行者自身即無作三身覚体．自心即一念法界内証也．故我色心従レ本仏体也．——中略——諸仏覚ニ三等一住ニ本覚心城一．衆生迷ニ一如一併ニ四生幻野一.」[5]

というように修験者自身も本来仏体なのである．そして修験者が本来仏体だということは，

「我等色心即胎金本具曼荼羅故．不レ動ニ行者当体一証ニ遮那覚体一．色即五大本有胎蔵曼荼．心即識大本有金剛曼荼也．色心不二衆生本有仏体也」[6]

というように，修験者も曼荼羅の一部であることを意味する．唯彼等は世俗の現象に迷わされていて，自分が本来仏体であることに気づいていないのにすぎない．それ故，

「唯須下覚ニ自身是仏一現身証中得本有金剛法身上.」[7]

ことが強く要請される．つまり何はともあれ，自身是仏と覚ることが肝要である．その為に彼等は山岳に行つて修行を積まねばならない．何故ならば，

「夫当峰者金胎両部浄刹無作本有曼荼也．森々嶺岳金剛九会円檀鬱々巌洞胎蔵八葉蓮台．——中略——入ニ比峯一輩不レ改ニ薄地底下凡体一忽登ニ胎蔵八葉中台一．踏ニ比地一者不レ転ニ父母所生肉身一全証ニ金剛不壊法身一．」(8)

からである．換言すれば，山岳にのぼつて金剛九会の円檀や胎蔵八葉の蓮台に踏入るならば，期せずして行者の色（胎蔵曼荼羅）・心（金剛曼荼羅）がめざめて，自身是仏と悟るようになるのである．

「安ニ住即身自仏心地一時．自然止ニ悪心一生ニ善心一．自他平等無ニ差別心一．——中略——然則行住坐臥所作皆是仏事也．信ニ知自身是仏道理一故全不レ労ニ自断証一不レ念ニ自生死一．但念ニ衆生沈淪一．以ニ一切所修行一廻向ニ衆生一．」(9)

こうして自身是仏の境地に到達した修験者は，自然に悪心がなくなり善心が生じてき，自分も他人も平等だと考えるようになる．行住坐臥がすべて仏のようになるのである．この段階に達したら何よりもまず慈悲の心をおこして，生活の苦悩にあえぐ人々の救済にのりださねばならぬ．ところでこの場合「仏」というのは，不動明王（第2図参照）を意味している．というのも不動明王が，「中台自証大日為ニ化他利物一下転ニ九界一」(10)したものであり，修験者の所期の目

第2図　不動明王の像

的にもつともかなつたものだからである．

凡そ上記のようなものが即伝の思想の大略である．一読してわかるように密教思想をほとんどそのまゝ借りてきたものであるが，少なくとも山を曼荼羅と考え，そこがとりもなおさず人間が本来もつ仏性開発の場であるととらえたことは注目しなければならない．

註 1.「修験三十三通記」	修験道章疏二	422頁
註 2.「宗教便覧」	時事通信社	159頁
註 3.「修験修要秘決」	修験道章疏二	368頁
註 4.「修験修要秘決」	修験道章疏二	378頁
註 5.「修験修要秘決」	修験道章疏二	380頁
註 6.「修験修要秘決」	修験道章疏二	389頁
註 7.「修験修要秘決」	修験道章疏二	378頁
註 8.「修験修要秘決」	修験道章疏二	396頁
註 9.「修験修要秘決」	修験道章疏二	380頁
註10.「修験修要秘決」	修験道章疏二	386頁

三

即伝の思想は後世の修験道に大きな影響をあたえた．徳川時代以後教団体制の確立にともなつて出された数多くの修験教義書もほとんどこの思想を展開したものにすぎない．けれども，前節で述べたように，現在この本は教団所依の教典にあげられながらも発刊されておらず，地域社会で実際に信者に接して宗教活動を行なつている修験者がこの書物を手にする機会はほとんど皆無といつてよい．

修験教団に所属している修験者が実際に手にして読んでいるのはむしろ，教団発行の教科書・雑誌・新聞・パンフレットの類である．もつともこれらとても，徳川時代の教義書と同じく，その内容は大部分前節で述べた即伝の思想をわかりやすくくだいて説明したものである．それ故こうした教団刊行物に見られる修験道の世界観・人間観・本尊観・成仏観とても

前節で見たものと大差はない．けれども，現在ではどのような表現方法によつて修験者にとかれているかを示すことは，のちに彼等の思想形成を考える上に重要な問題を提示することになるであろうから，煩瑣をいとわず，聖護院発行の修験者向雑誌「修験」にのつとつて，現代修験教団の教義を簡単にあとづけて見よう．

世界観　修験道の世界観では，

「宇宙はそのまゝ曼荼羅の開展であつて，法身仏（大日如来）が種々様々に身を現わし，種々様々に説法し，種々様々に心を示して居られるのである．[1]」

と世界を把握している．ここで述べられている曼荼羅という言葉は，

「曼荼の語基に，羅の後接語が附せられてなつたもので，曼荼とは心髄・本質の意味，羅は所有の意味・成就の意味であるから，曼荼羅とは本質心髄を有しているものという意味になるのであります．即ちその本質は仏（大日如来）のさとりで，そのさとりを成就せる境地が曼荼羅と云うことになるのであります．[2]」

とされている．換言すれば，それは，

「仏陀の世界であり，浄土である．そしてその主宰者は大日如来であり——中略——これが人間の機根に応じその救済のために，諸仏諸菩薩の姿となつて現われるのである．[3]」

つまり修験道では宇宙の現象を曼荼羅（仏の世界）のあらわれと見ているのであり，現実の現象の背後に曼荼羅を予測しようとしているのである．

山岳観　けれども修験道でいう曼荼羅は決して現実から隔絶したところにあるのではない．

「修験道よりすれば，大峰・吉野より熊野に至る大山脈は両部の曼荼羅なのです．

両峰の曼荼羅とは手つとりばやくこれを云へば大日如来の徳が諸仏と

なつてあらはれたものと見ることができます．——中略——ですから山も草も木も直ちに大日法身の現はれであり，峰吹く嵐も谷のひびきも，皆これありがたい法身の説法なのであります．[4]」

とされている．すなわち，これらの山岳を曼荼羅と考え，そこでは大日如来が系統的に諸仏諸尊としてあらわれていると説明しているのである．

人間観　曼荼羅中の諸仏諸尊に対して，

「吾等凡夫も亦根本は大日如来よりの発現であるが，而も吾等は宇宙全体に通ずる根本の特性を発揮せず，限られた局部的な自己に執着して，真の仏の子たり，仏の分身たることを自覚していないのである．——中略——現実の自己の見えざる背後には祖先があり，更に無数の因縁があつて現実の自己は存在し得ているのであり，この自己の生命の最後の根抵が大日如来である．[5]」

というように，人間は本来仏性（大日如来と同じ性質）を持つているけれども煩悩にまよわされてそれを開発していないだけにすぎない．仏性を持つている以上人間も結局は諸仏諸尊と同じではないかといつている．

成仏観　元来仏性を持つ人間は，自分は仏の子であるということを自覚し，菩提心をおこして，大日如来をはじめとする諸仏諸尊のあらわれとされている山岳で修行し仏性を開発することが必要とされている．つまり，

「私共が修験の法流を汲み入峰抖擻の練行を重ねますことは，畢竟するに験得を得る——法力を成ずること——を目標とするのであります．その験得を得ることは即ち私共凡夫が心眼を開いて大安心を得ることであり，覚者（ほとけ）たることである．[6]」

とされている．この間のことをもつと詳細にながめて見ると，

「大峰修行では，曼荼羅の外廓の低い位置から十界の修行を通じ，諸尊諸仏の心城に分け入つて，最後に深山の伝法道場で秘法を伝え，父母所生のこの肉体のまま仏の位に融合する．[7]」

ということになる．こうした段階に達した修験者は，

「大悲利他の心を以つて専ら鎮護国家・国家安康の為にまごころをつくさねばならない．[8]」

とされている．この目的達成の為に彼等は実際には加持祈禱等を行なつて信者の要請に応えているのであるが，教団側機関紙等には加持祈禱の教義的説明はほとんどなされていない．

本尊観　修験道では修行や加持祈禱に際して大日如来を中核とする曼荼羅中の諸尊を皆本尊として崇拝しているけれども，特に修行専念の本尊として不動明王をたてている．これは不動明王が，

「常に火生三昧に住し，炎々たる猛火の中に安住して，諸々のさわりやけがれをやきつくし，怨敵・魔群をうちくじき，又身をていして奴僕となつて行者の供養を受けて昼夜これを守り，よく行者の菩提心を成願せしむる本誓．[9]」

であるからだといわれている．

以上くどくど引用しながら，一応現代修験教団の教義に見られる，世界観・山岳観・人間観・成仏観・本尊観の輪廓を示してきた．このように，修験道では，現実の世界の現象はすべて大日如来を中心とする曼荼羅のあらわれであり，しかもこの曼荼羅は我々が容易に行くことが出来る山岳そのものとされている，そして人間も大日如来のあらわれ故元来仏性を有しているが煩悩にまよわされてそれを開発していないのだから，このことを自覚し，菩提心を発して曼荼羅そのものである山岳で，不動明王をよりどころとして修行することによつて仏となるよう努めなければならぬ，というように要約される教義が，雑誌・新聞等のメディアによつて修験者にとどけられているのである．

註 1.　「修験」　88号
註 2.　「修験」　88号

註 3.　「修験」　79号
註 4.　「修験」　32号
註 5.　「修験」　79号
註 6.　「修験」　109号
註 7.　「修験」　32号
註 8.　「修験」　32号
註 9.　「修験」　90号

四

修要秘決集の構成からもうかがわれるように，修験教団では教義の伝達にあたつて，新聞・雑誌等のメディアによつたり，説教の形をとるよりも儀礼の説明という形で伝えられたり，儀礼のうちにおり込んで伝えられることの方がはるかに多く，このような意味では入峰修行や供養法等の儀礼が教義と密接にむすびついていると考えられる．それ故，修験者の思想の形成過程をあとづけようとする際にも，儀礼とむすびついて伝達される教義の内容と伝達のされ方を考えて見なければならない．

修験者が入峰修行の際に着るいでたちは総じて修行の本尊不動明王の像を形どつている．すなわち不動が身にまとつているものや持物を象徴化したのが，頭巾・班蓋・鈴懸・金剛杖・笈・肩箱等であり，その働きを象徴化したものが，結袈裟・念珠・錫杖・引敷・大刀である．そしてこのことは祭典の都度おこなわれる山伏問答で衣裳をつけた教団幹部の修験者によつて，

問　「仏に従ふ姿は様々あれど，特に山伏の異形なる姿其故如何に」

答　「山伏修験の出で立ちは，是ぞ即ち此身を不動明王の尊像に段取なり」

問　「額に頂く頭巾は如何に」

答　「頂上降魔之頭巾は，是ぞ即ち武士の甲冑に等しく，五智の宝冠にして十二因縁の趣を取，前八分に着するは，不動明王頂上八葉

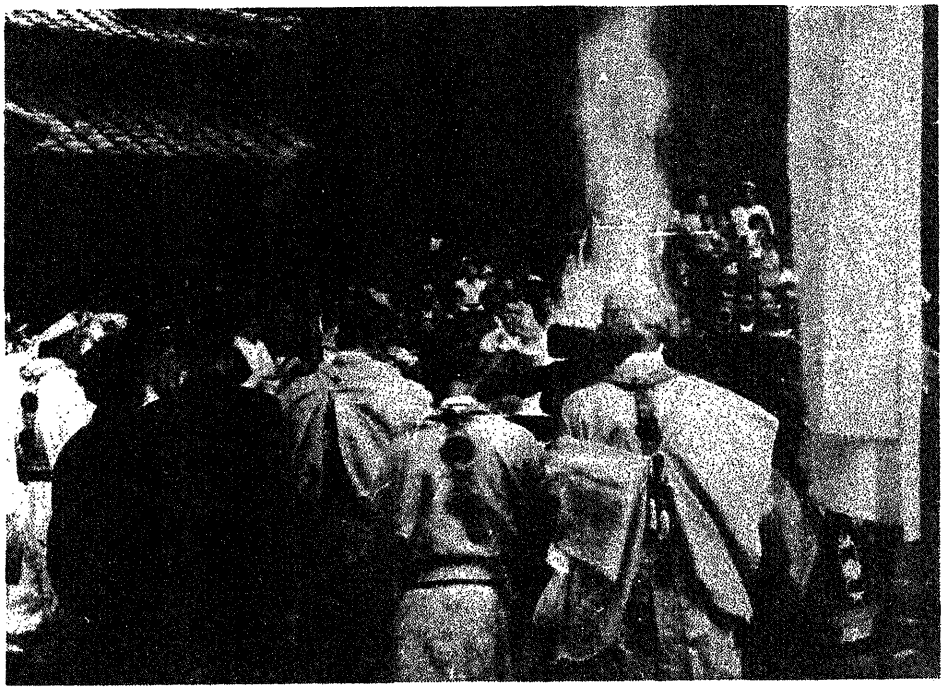
蓮華は此頭巾の裡に在ることを示し，即身即身の惟体にして，大日如来の極位なり」[1]（以下略）

というように多数の祭典参加の修験者や信者の前で大声で述べられるのである．教義的にはこのように説明されている修験者のいでたちは，修験者服部如実氏が述べているように，[2]近代登山の装備に比べても遜色がないぐらい登山には便利にできている．そして彼等の間にあつては，その修行上の便利さが，修行の守り本尊不動明王を形どつたからであると理解されている．

入峰修行の指導は，教団入峰の際は教団幹部が，講の入峰の際は先達がしている．今大峰入峰を例にとつてその順序をあとづけよう．入峰に先立つて修験者はまづ山麓の滝又は川に入り，「沐浴身体当願衆生，内外清浄身心無垢」と唱えて，各自のせおつている世俗のちり，あくたをはらわなければならない．これをすませて山にさしかゝるとまもなく発心門に達する．ここで修験者は，発心して信仰の心，仏に帰依する心をおこすことを要請される．次にあらわれる修行門では，本式に心身の修行に入る心がまえを作るよう求められる．普通ここから先が女人禁制とされている．この門を出てからさき，修験者は十界の修行を行ないつつ，仏の境地に達するよう修行をつまねばならない．

十界修行というのは，元来人間が順をおつて修行を積むことによつて，仏の段階に達するまでの，地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天・声聞・縁覚・菩薩・仏の十界に床堅・懺悔・菜秤・水断・閼伽・相撲・延年・小木穀断・正灌頂の儀礼をあてはめたものであつた．[3]しかしながら，現在ではこれらの儀礼はなされず，唯山修行の色々な動作やそれにともなう苦しみの一こま一こまが，究極目的である仏界に達するために耐えしのんでいかねばならぬものとして，十界の一つ一つにわりあてて説明されている．すなわち，

第3図　大峰山のぞきの行



第4図　護摩祈禱をする修験者　（220頁参照）

「炎熱に汗を流して苦しみ,風雨冷寒をしのいでよく耐えることが地獄行」・「空腹を感じ，水に渇し，しかも不平不満を訴えず，又粗食に甘んじて足るを知るのが餓鬼行」・「重い荷物を負つて嶮坂を登り，匍匐して嶮岨をわたつて労苦をいとわぬのが畜生行」・「山中で人におくれないようにつとめ奮発の心をおこすのが修羅行」・「懺悔懺悔六根清浄と高い峯を仰いで進むのが人間行」・「山頂に登り，眺望を楽しみ，歓喜法悦にみち，寿命延命の思いをするのが天道行.」

とされている.(4)

山頂近く今一つの門がある．等覚門である．この門迄が凡夫の迷いの修行で，これを越えた処から聖者の覚りの修行に入る．表・裏の二つの行場での修行がこれである．岩石が累々としたあい間をのぼり，おり，ぶらさがりつつ，随所にある祠で説明をきき，所定の唱えごとを唱和する．この修行中の白眉は，修験者をさかさまにつるして，数百米の絶壁をのぞかせる「のぞきの行」である（第3図参照）この行がすむと，「ありがたや西ののぞきで懺悔して彌陀の浄土に入るぞうれしき，おんあびらうんけんそわか.」という唱えごとがなされる．二つの行場での修行は，

「これらの説明を先達に聞いて通暁する声聞行」・「山の語る大自然の声をきいて無明煩悩を克服する縁覚行」・「同行相たすけ利他化益の奉仕をする菩薩行」

になぞらえられている．これをおわつて最後の門である妙覚門をとおれば山上本堂に達する．本堂で読経し，感謝祈願する（仏行）ことによつて入峰修行が達成される．こうして即身即仏の境地を体験することができるといわれているのである．修験者服部如実氏はこの体験を，

「大峰の奥通りを修行した時には，大日ケ岳の頂上から，此峯をとりまく山勢と其処に屹立する奇岩，怪石に三部の諸尊済々として羅列し，無数の聖衆奇々として安座し給ふを実感し，凡身尊くも曼荼羅の中台

にある思いがした.[5]」

と回想している.

入峰修行に際して，苦しみつつ行なつた修行をとおして教義上の世界観(山岳観)・人間観を説明され，更に仏の境地に入り得たととかれた修験者は，山を下つて自分の家にいる時も日夜本尊(不動明王であることが多い)を前にして，教団所定の勤行集によつて読経しなければならない．こうした勤行集の一つ，「修験道勤行要集」は，本来天地の神と同体である人間が，(清浄の祓) 悪業・貪・瞋・痴をすべて懺悔し，(懺悔の文) 煩悩をほろぼして，(法螺の文) 六道輪廻のねむりをさまし，菩提心をおこして(九条錫杖経) 観音経・般若心経等の経を読誦して，如来の真実の義を解するように努め，更に十二社権現・役行者・不動等のおこないの書いてある文や諸尊の真言，日本中の神々を供養する宝号をとなえることによつて，本尊に帰依を表明する.(三帰三竟) という形式のものである.

経文は観音経・般若心経と諸真言以外は大部分平易な文章で書かれており，しかもその中に修験道の世界観・人間観・成仏観や本尊の性格などの教義がおり込まれている．つまり修験者が日夜これを読経することによつて自然と自分自分の考え方の中にとり入れて行くようなしくみに作られているのである.

修行が進んだ修験者は本尊を供養する修法——多くの場合不動法——を授けられており，本尊不動明王の前で随時にこれを行なつている．不動法——十八道ともいう——は護身法をして「一切の法は自性清浄なるが故に我亦自性清浄なり」と自覚したのちに，不動明王を客として招いた主人公——修験者——が不動と感応相応して一体となり心眼を開く，ということを非常に複雑な印契と多種類の真言でもつてあらわすのである．今一応その順序を示すと，身仕度をした主人 (修験者) が，自分の身・口・意を清め，客——不動——を招くのに邪魔になる悪魔をおいはらい，柱をたてて

座敷を作り家をととのえたのちに，車を迎えに出して，客を座敷に招き，種々の饗応をして，客をよろこばすと共に自分も一緒になつて楽しむという一こま一こまを印契——指を色々に組みあわせてつくつたかたち——であらわすのである.[6] この記述からわかるように，山岳に登つて不動明王のいる処に行つて仏性を開発するという修行がここでは一印一印を丹念におこない不動をまねいて入我我入の観に入ることによつて達成されるという形式になつている.

不動法はかなり修行の進んだ修験者が50日の前行をしたのちにはじめて，密室で一印一印修験道の教義にてらしてその意味を説明されながら授けられる秘法であり，この修法が他人に対して特に秘せられるよう要請されているのは云うまでもない．修行施行の際は上に記した各印契ごとに，その意味を深く考え，こうした印契によつて実際に本尊を招くのだという強い信念を持つてなさねばならぬとされている．それ故にこそ進んだ修験者にあつてはやがてこの修法を修するときはいつでも本尊と入我我入の境地をあじあうに到るのである.

以上見てきた，入峰修行・供養法等の儀礼からも，修験道では，人間がこうした儀礼を行なうことによつて本来持つている仏性を開発し得るという教義を，行動にむすびつけた形で，更に行動をとおして把握させようとしているということがうかがわれるのである.

また修験者の側でも，教義をとり入れて自分の思想を形成する際，印刷物によつて教えられたもの以上に，こうした儀礼を媒介として伝えられたものの影響を強く受けていることは充分推測され得るであろう.

さて，仏性を開発し得た修験者は教団側から，

「顕密二教一致の妙理を悟り，真俗一貫の菩薩道を顕揚し」（修験宗）

「即身即身の悟境に達することによつて群生を利し」（修験道）

「即身即身の妙理を解し，天下泰平・興隆正法・国利民福の祈願をなし」

（金峰山修験本宗）

というように，信者の日常生活の上でのなやみの解決にあたるよう要請されている.[7] そして，上のようにどの教団もこのことを教団の主要目的として大きくかかげているのである.

こうして，教団側から，本来仏性を持つているのだから入峰修行や供養法によつて，即身即仏の境地を体得し得るのだという教義を伝達されている修験者は，同時に，ちがつた方向の人々——信者——の宗教的要請にも対峙しなければならないのである.

註 1.「山伏問答法貝由来」五流尊瀧院蔵
註 2. 服部如実「山に祈る」83頁—93頁
註 3. 村上俊雄「修験道の行事作法」仏教考古学講座所収 参照
註 4. 聖護院門跡「入峰の栞」昭和33年
註 5. 服部如実「山に祈る」7頁
註 6.「不動法次第」 五流尊瀧院蔵　参照
註 7.「宗教便覧」 時事通信社　159頁

五

修験者が入峰修行につれて行く信者は，教団側が修験者に教えているように仏の境地に入ることを目的としているわけではない．昭和28年木曾御岳の登拝者125名について入峰修行の動機を調べた調査では，家内安全・商売繁昌・病気平癒等の祈願 57% 御礼詣りのため 31% 精神修養のため 20%　半ば信仰的，半ば遊山の為9%となつている.[1] これで見ると家内安全等の祈願とそれの成就を感謝しての御礼まいりという所謂現世利益的性格のものが 88% に及んでいる.

山をおりて村や町に帰つた修験者は自宅かそのそばの堂に本尊をまつり，平素は読経とか不動法によつて本尊を供養し，常時本尊と入我我入の観を味つている．このような修験者の処に不幸や災害におそわれた人がそ

れをのぞいてもらうよう頼みにおとずれるのである．彼等の依頼の内容を推測するてがかりとして，一祈願所の昭和33年1月から6月迄の187の願事を分類すると，病気平癒94(49%)，厄除33(18%)，心願成就30(16%)商売繁昌16(3%)，家内安全11(7%) その他 3 (1%) となつている．この内病気では約3割が精神病であり，その他では胃腸病・結核が多い．又虫封・安産の祈禱もかなりある．厄除には盗難・方角・縁談があり，心願成就の心願には入学試験・勝訴・選挙等が見られる．入峰修行について行く信者の願事といい，加持祈禱の内容といいほとんどが現実の生活上の問題に集中していることに注目しなければならない．

このように現実の生活上のゆきづまりの時に加持祈禱にすがろうとするのは，何もこの祈願所に限られているわけではない．昭和25年に文部省の迷信調査協議会がランダム抽出による全国小学校265校の生徒父兄6373名を調査した集計によれば，その内2993人 (46,96%) のものが，多少とも祈禱の効果を認めているのである．(2)

それでは，何故に人々は修験者にこのようななやみの解決を期待するのであろうか．一体，信者はこうした不幸をどんな原因によると解釈し，修験者にどのような手段をとつてもらうことによつてこれを解決してもらおうとしているのであろうか．この点を解明する手がかりとして，少しく信者の依頼の手紙を引用して見よう．

「元来体が弱く，其上，頭・右耳の病気で悩んでいる．又人一倍不器用でいつも苦しんでいる．又一日も早く良き適職に就きますよう，お願い致します．これら一切の悪因縁をはらつて下さい．」

「願人は本年厄年にあたりますから，特に身体状況あらゆる災難をよけていただきたくお願いいたします．」

「家と本人の憑きものはらい．」

上の手紙から推測すると，信者は自分達の不幸・災難は悪因縁によるも

のと把握しているのであり，修験者はこのような悪因縁をたち切る力を持つていると考えているのである．ここで注目しなければならないのは，彼等が，修験者に悪因縁をのぞいてくれるよう頼むのであつて，決して修験者をとおして本尊に悪因縁の除去を祈願してもらうという形式にはなつていないということである．つまり信者は修験者が超自然的な力を持つていると考えて，彼等に悪因縁の除去を依頼していると考えられるのである．

註 1.「木曾御岳調査中間報告」 山の会

註 2. 迷信調査協議会編「日本の俗信」III 別表参照

六

教団の側からは，仏性を開発しろ，といわれ，信者からは悪因縁の消除を求められている修験者は一体どのような宗教生活史を背おつた人達なのであろうか．

豊前の英彦山・伊予の石鎚山・美作の後山・吉野の大峰山・木曾の御岳・富士山・出羽三山等の山には毎年夏になると数多くの入峰修行の講員が，先達と称せられる指導者にひきつれられて修行に訪れる．先達は多くの場合長い間講員として入峰しているうちにその経験をかわれて指導者に推された人であり，すでに近所にいる修験者の紹介で修験教団に所属して先達補任状をもらつてその一員となつていることが多い．憑かれたように山に登る先達は，

「ただ私が毎年石鎚に登拝する理由は外でもありません，お鎖の無我の境地を大変よいものと考えているからです．」[1]

という段階をへて，

「霊山大岳に登つて日出・日没の雄大なる大自然の内に仏を点禱礼拝すれば，この神秘のかなたなる沈黙の声が，心身底をうち，金色の仏身が眼前に示現するのである．」[2]

という体験をつむに到る．そして更に彼等はこうした体験によつて何か神秘な力を得たと感じるのである．

「呼ぶ心祈る心の内から仏を見つけ出すのである．そこには必らず霊感，交感があり，神秘力を感得して仏を認めるにいたるのである．[3]」

ところでこうした祈りの内に，神秘力を感得したと考えた修験者が自分又は自分の身近かな人の不幸に直面した場合，神秘体験のうちに体得した神仏をたよつてその不幸の除去を求めようとする．

「神は人の心の中に住んでいる．——そしてその心の持ちようで善心にでも悪心にでもなる．——私はすぐそう思いました．そう考えるにつけ，やがて俺は必らず病気をなおす，必らず石鎚大神のおかげをいただくのだと何か確信めいた祈りになつているのに気がつきました．[4]」

という投書に見られるように本尊の前で

「謹み敬て，本尊界会，法界体性，大日如来——中略——日本国中大小の神祇冥道に申して白さく，方に今比道場において（祈る人の名を申述る）至誠に六根の罪障を懺悔し，大乗の妙典を読誦し奉り，諸尊の秘密神咒を持念して，法楽荘厳威光増益の御為に法味を供養し奉る．仰ぎ願わくば，本尊界会慈悲の眸を開き某（祈る人の名）の丹誠を照覧して，速かに（願事を申述る）の祈禱を哀愍納受して悉地成就せしめたまえ．[5]」

という表白をなし，何回となく勤行集所収の諸経を読経することによつて本尊に祈るのである．つまり，この表白に見られるように，自己の罪を懺悔して一心に祈ることによつておかげを得ようとするのである．

こうした行動によつて自己の災害を克服したり，あるいは自分の身近かな人の不幸をすくつたと信じた修験者は一層強い信仰体制を作りあげて行く．大阪の一修験者は，

「32才の時，5つになつたたつた1人のこの子が肺炎で助からんと2人

の医者にいわれて，もう29年も前になりますかいなあ，神さんにたのんだら治りまして，おがんでましたら，お大師さんが出やはりまして，『暴利なことせなんだら助けてやる，百姓にしても何商売でも正直でいたらよい』といわれたんです．正直一本にやると心に決めておがんで娘は助けてもらいましてん．私は鞍馬の滝に204日そば湯でこもつたり，あつちこつちの滝で行してましてんけどな．娘助けてもろうてからは行もいつそうつむようになりましてな．[6]」

と朴訥な口調でその信仰体制形成の過程を語つている．このような体験談には昭和28年から30年にかけての石鎚社報（石鎚本教発行，月刊）をひもどいただけでも，「信念によつて脱腸をなおした話」「種々の御加護——自力の必要」「根本療法」「人は神と」「心の療法」「心の修行」「信念は神助を賜る」等々のものがみられるのである．これらの表題からもうかがわれるように，彼等は強い信念を持つて神仏の加護を祈つており，おかげをもらつたと信じた後はより強い信念を持つようになつている．

こうして自己又は身近かな人々の病気や不幸をのぞき，確固たる信念を持つにいたつた修験者は，次第に周囲の人々からあの人は法力があるとの評判をえ，やがて現実生活上でのなやみを持つ人々に訪ねられ，それに応じて加持祈禱をするようになる．

ところで，修験道の教義によれば，

「現実の自己の見えざる背後には祖先があり，更に無数の因縁があつて自己は存在し得ているのであり，この自己の生命の最後の根抵が大日如来である．[7]」

とされていた．けれども修験者はこれをより実際的に解釈している．一修験者は，人々の不幸の原因とその消除の仕方について，

「世の中に，病気，災難をはじめとして，財産・事業・家庭・縁談等にめぐまれぬとて，幾多の不運に悩んでいる人は実に多いと思われる．

これらはすべて因縁によつて生ずる．之を運命として諦め，不満に泣きながら日を送られるということは全く不幸のきわみである．しかしながら加持祈禱等によればすべての不満災難などの悪因縁は解除されて幸福繁栄の道にかえることができるのである．[8]」

と述べている．不幸の原因を悪因縁にもとめこれの消除の手段として加持祈禱をあげているのである．教義による抽象的な因縁の把握が非常に具体的なものとされ，前節に見た信者のとらえ方にいちぢるしく接近していることが注目されよう．

このような考え方に立つと，加持祈禱をするにしても，まず神仏の教示によつて，いかなる悪因縁が働いているかを知り，それに応じた祈禱をしなければならないということになる．その為に修験者は，筮竹・そろばん・米等を用いた易や姓名判断・手相・人相等にたよることも多いが，最も多いのは，自分で神がかりしたり，又は自分の妻や近親の神がかりの能力を持つ人の助けをかりる方法である．神がかりは一修験者の説明によると，

「正しい神がかりは，『無我』という条件が必要ではないかと思うのであります．つまり神を拝んで無我に達した時に始めて神がかりがあるのではないかと思います．神様の前に自我意識を意識の外に去つて一念に念ずる時，本来の心にある神（霊）がめざめて，大自然の中の神々に相通じるのではないでしようか．此の時にこそ，神様の神示や教えをうけることができるのではないでしようか．[9]」

と説明されている．神がかりにも修行による神秘力の体得と同じ修行が要求されているのである．

これらの種々の手段によつて，不幸の原因がわかると，それに応じて加持祈禱の修法がなされる．例えば，金神のたたりには「金神除法」・邪神のたたりには「霊火止作法」・死霊のたたりには「死霊教化の事」・精鬼には「除魔大事」・荒神のたたりには「荒神放捨秘法」・牛王のたたりには「牛

王返の大事」・きつねには「野狐放大事」等を修するのである．こうした修法は，各々の修験者が自分で感得したと称している場合もあるが，大部分は自分の師匠から相伝の秘法として授けられたものである．

種々の修法の中でも最も弘く行なわれているのは，護摩法と呼ばれる祈禱法である．これは不動法を多少かえたもので，まず修験者は護身法を行なつて自己を清浄にし，炉檀をととのえたのち本尊を招く．次いで表白によつて願事を述べ，炉檀で火をたき本尊を供養し，本尊と一体となつて，依頼者の不幸の原因をしつたのちその悪因縁をたち，願事を成就させるという手順になつている．[10]（第4図参照）

以上のべてきたような加持祈禱を修する際の心がまえについて，羽黒山の修験者，島津伝道氏は，

「要するに祈禱とは，吾人の願望を成就せんがために本尊に対し奉りて懇禱する法にして，如実に自心を諦らめ三世の因果を信じ，滅罪生善の大業を満じて三密相応する時，其の修するところの功徳力，如来所応の印明加持力，法界法爾の自体力，此の三縁，妙に契合して所求の一切の事，悉地成就するものなりと謂ふを得べし．[11]」

と云つている．

註 1．石鎚社報　33号（投書）
註 2．宮城信雅「神秘の根底を慕う心」（手記）
註 3．宮城信雄　上掲手記
註 4．石鎚社報　44号（投書）
註 5．「修験道勤行集」修験道本庁
註 6．小口偉一編「宗教と信仰の心理学」89頁
註 7．「修験」79号
註 8．「昭和36年運命宝鑑」神明館蔵版 70頁
註 9．石鎚社報　51号（投書）
註10．「不動護摩法次第」　五流尊瀧院蔵参照
註11．島津伝道「羽黒派修験道提要」162頁

七

あの修験者の祈禱はよくきくという評判が高くなり，願事の依頼者もふえてくると，彼等は教団本部と正式の手続をとつて祈願所を作り，更に教会迄作るようになる．これに対して直接に信者のこの種の宗教的要請に応じ得ない人は，その地域社会では唯単に登拝講の先達に止まり，修験者としては認められなくなる．そしてもし彼の講中に色々な修法によつて講員の現実生活上の悩みを解決し得る人がでた場合には，実際上の指導者の地位を失い，講の先達としての座すらゆずらねばならなくなる．それ故，修験者にとつては加持祈禱によつて効験を示すということは，地域社会において修験者として認められ，その地位を確保するための必須の条件なのである．

こうした立場に立つている修験者が，地域社会の信者から修験者として認められようと思えば，自分は加持祈禱によつて人々の願事を達成する力があるということを，色々な形で意味づけて宣伝し，信者にこれを認めさせなければならない．

「世に加持祈禱を修するものは多いが，悪因縁の解除の良くできる誠の行者は実に少い．何故ならば捨身修行して宇宙の真理を悟り，三世の因縁の理法をわきまえて，即身即仏の妙理を体験し，仏の大悲を証得して恵まれぬ衆生を済度して行くという信念にもえた智，徳共にそなえたものでなければいけないからである．[1]」

しかるに自分はかゝる捨身修行をした修験者であると自己宣伝をするのである．

上の文を一読すれば捨身修行が加持祈禱の重要な条件となつていることがわかるであろう．修験者の真精神を実修実証に求めようとした服部如実氏も

「この実修実証を宗教的に云ひかえると，持咒得験となる．強い信念を持ち，実際の修行によつて勝れた法力を得ることである．[2]」

と，修行の目的を法力——持咒得験——の獲得においている．すでに私は教義において，「入峰抖擻の目的が験得を得る——法力を成ずること——にある．」ことを指摘した．しかしながら，その際の法力は，「私共凡夫が心眼を開いて大安心を得ることであり，覚者(ほとけ)たること」であつた．換言すれば即身成仏の手段としての入峰であつた．教団側ではこのような意図にもとづいて入峰修行を奨励し，入峰の回数が教団内の地位決定の重要な要素にまでなつているのである．けれども教団側のこのようなねらいにもかゝわらず，実際に信者に接して宗教行動を行なつている修験者によつては，同じ法力の獲得という言葉が，即身成仏という意味ではなくして，持咒験得の獲得，換言すれば，加持祈禱を行使するための力，修法の効験をあげる為の力の体得というように解釈されているのである．

入峰目的のとらえ方が違つてくると，当然入峰修行の場所である山岳を中心とした世界観，入峰修行を行なう主体である修験者の性格に関するとらえ方——人間観——等も違つてくる．

世界観　まず修験者が把握している世界観を眺めて見ると，

「見聞のできる現実世界に対して，普通一般の知識では見聞のできない神秘の世界があることは否定できない．この現実の世界と神秘の世界の二つの世界とはいうものの決して別々の存在ではなく，一個の一大宇宙の部分である．この肉眼や肉耳に入らぬ神秘の世界が根底になつて現実世界があらわれていること，あたかも大地に深く入つている根帯があつて，其上に樹木があらわれているようなものである．[3]」

というように，現実の人間生活のいとなまれている世界とその背後にあつて，現実の人間生活を支配している神秘の世界が対応されているのである．そして，

「この神秘の世界では唯我々人間の霊のみならず，下は諸々の動物の霊から上は諸仏諸尊や神々がきちんと秩序だつた位置を占めて存在している，その中心をなすすべての統轄者が大日如来であり，これが宇宙の大霊の根本であり，それから諸仏諸尊があらわれ，更に人間の霊もあらわれている．神秘の世界は仏の世界であり，霊の世界でもあり，また我々の死後霊が行く浄土でもある．(4)」

とその内容が説明されている．宇宙を法身仏大日如来が種々様々に開展したものという抽象的な教義の説明が，現実の世界と表裏の関係にあつてそれを動かす神秘世界の諸仏諸尊を始めとする諸霊を認め，それら諸霊の主宰者として大日如来を位置づけるというようにかわつているのである．

こうした世界観によつて人間の運命を支配していると考えられている因縁も説明される．広島県の一修験者は，

「この世の中の一切の現象は霊界の諸仏や諸霊の因縁によつて動いている．だから立派な仏様の御守護があるとそれだけ良い因縁を持つことができて立派なおかげをもらうことができる．ところがつまらない動物霊や，死霊，生霊がつくと大変なことになつてしまう．精神病（きつねつき等）を含む多くの病気，事業の失敗等のようなことがおこつて日常生活がうまくいかないのは，結局これらの良くない動物霊や死霊，生霊の因縁によつている．この悪霊をはらう仕事を霊界の支配者大日如来は不動明王に命じている．(5)」

とこの間のことを説明している．ところで不動明王等のいる神秘の世界は決して人間生活から超絶したかなたにあるのではなく，実際に人間が行つて，修行することができる山岳である．この山岳に不動明王と同じ衣裳をつけた修験者が，不動明王と一体となろうとして修行に訪れるのである．

本尊観　この場合彼等がとらえている不動明王は，

「悪因縁をたちきつて，良い因縁を生じさせる守り本尊です．火焔の中

にかつと見ひらいた目でもつて，悪霊の因縁をみきわめ，そのさわりやけがれをやきつくして，人々に良い因縁を授ける.[6]」

仏なのである.

成仏観　ところで，彼等が不動と一体になることによつて得ようとしているのは，聖護院門跡が訓示したように，「不動明王の動かない確固たる信念」だけではない.[7]

「大智慧の故に大火焔を現じ. 大智の剣を執つて貪瞋癡を害し，三昧の索を持して難伏の者を縛す. ——中略——衆生の意想各々不同なれば衆生の意に随うて利益を作り所求円満せしめたまう.[8]」

不動の働きそのものを体得しようとし，よし体得しないまでも，その助けをかり得るだけの力を得ようとしているのである. そして激しい修行の末に

「滝に入つているとまず自分の姿が現われ，つぎに火炎になつて『不動』(不動明王) になります. それで不動さんが現われたら自分にまたなつている.[9]」

という前にも引いた大阪の一修験者が話しているような段階にいたる. これが進んで不動と一体となつて修法をしていると感ずるようになるのである.

人間観　ところで彼等の持つている人間観は，前節でその宗教生活史をあとづけた時に示したように，悟りとか慈悲の潜在能力——仏性——を持つた人間という抽象的意味ではなくて，本尊を一心に祈つて修行をつむならば人間とても，現実に不動明王を認め，その法力を体得し得るだけの潜在能力を持つているという考え方に展開しているのであり，しかも血のにじむような激しい修行によつてこのことを証得しているのである.

「行つみますと，他人のみえんものがみえる，きこえんものがきこえる. 身体がういてくる，足が人間と思へんほど速うなる，臭もききま

すなあ．こうして神通力を備えると行者は即身の仏になります．」[10]

という体験談が何よりもよくこの思想を表明しているであろう．

上の記述からわかるように，依頼者の現実生活の不幸の原因を現世の根底にある霊界の悪霊の因縁によるとし，修験者は霊界に入り込んで，不動明王と一体となり，悪因縁をたち切る力を体得して，それをのぞき，人々に幸をあたえるという思想が，信者の依頼に応じて行う加持祈禱の意味づけとなつているのである．すなわち，山に修験者を導びくことを目的とした教団の教義が，入峰修行の意味づけに終止していたのに対して，修験者の思想は加持祈禱の意味づけに重点をおいているのである．そして修験者の思想では入峰は目的ではなく，加持祈禱の手段となつている．このことは彼等の宗教生活の目的が信者の宗教的要請に応えるということにあつたのを物語つていると推測される．すなわち，入峰修行に中心を置こうとする教義の要請にもかゝわらず，地域社会において宗教的指導者としての地位を守つて生活して行くために積極的に加持祈禱に頼らなければならたかつた彼等の宗教生活上の宿命が，[11]彼等をして教義上の言葉の意味を信者の把握の仕方に近づけて解釈するという必死の思惟行動にみちびき，これが上記の思想を生みだしたと考えられるのである．

最後に注目せねばならぬことは，修験者が，信者の依頼に応じて加持祈禱を行ない，その人達の所期の目標を達成させ得た時には，加持祈禱という宗教行動がききめがあつたと共にいなそれ以上に，元来そうした行動の意味づけであつた自分達の思想が正しかつたことを実証するものである，と考えているということである．こうして上記の修験者の思想は，彼等が自分で体験し，行動し，確かめ得たものとして，内面化され，信仰体制となつて行くのである．

この信仰体制が彼等をして一層熱心に加持祈禱という宗教行動にかりたてさせているのは云うまでもない．次の機会にはこうした思想によつて一

—より正確には信仰体制によつて——うらずけられている修験者の行動の型——儀礼——について考えて見ることにしよう.

註 1.「昭和36年運命宝鑑」神明館蔵版　70頁
註 2. 服部如実「山に祈る」 38頁
註 3. 宮城信雅「神秘の根底を慕う心」(手記)
註 4. 宮城信雅 上掲手記
註 5. 広島県府中市　橋本弘龍談　昭和33年3月
註 6. 同上
註 7.「修験」　75号
註 8.「聖不動経」修験道勤行集所収
註 9. 小口偉一編「宗教と信仰の心理学」 87頁
註10. 小口偉一編「宗教と信仰の心理学」 87頁
註11. 宮家準「修験道の組織」宗教研究166号

(この論文は昭和37年10月14日 日本宗教学会第21回学術大会における研究発表に加筆したものである.)